

## 栗本丹洲と魚譜 (一)

—丹洲の生涯とその研究—

福 島 好 和

### はじめに

渋沢敬三、号を祭魚洞という。常民文化研究所を開設し、その所内に日本水産史研究室を設けたのは昭和九（一九三四）年である。同氏はこの研究室において多くの水産業史に関する業績をあげた。その一つに『魚名集覧』<sup>(1)</sup>がある。

『魚名集覧』は魚類語彙辞書であるが、その内容は、魚名学名、各地方の常民が名付けた魚方言、古文獻に散見する魚名などを対照したものである。したがって、単に用語辞書というだけのものではなく、水産業史の研究の基本的な文獻となるものであることはいうまでもない。

特に、水産業史研究の立場からの関心は、古文獻にみえる魚名と現和学名との対照であるが、渋沢は「古文獻に散見する魚名で触目したもののうち略魚種認定の確かなもの」<sup>(2)</sup>を和学名と対照したといっている。しかし、この古典魚名（古文獻に散見する魚名については、以下こう呼ぶ）について、すべてが比定されていないこと、比定されてい

るものについても再吟味すべきものがあることなど問題はまだ残されている。特に、渋沢が網羅したとする古典魚名について、その多くは『古事類苑』の動物部所引の古文獻によっているらしい<sup>6)</sup>。渋沢がこれら諸古文獻のうちどれほどのものを直接検索したかは知ることはできないが、一応そのほとんどのものが『古事類苑』によつたであろうと推察してまず誤りはあるまい。ただ中には、渋沢が直接検索したと思われる古文獻として確かなものもいくつかある。そのうち『古事類苑』に引用されたものとして記さず、書目表の最初に記す文獻に『栗氏魚譜』すなわち栗本丹洲の「魚譜」がある。

渋沢は水産史研究室を開設以来、多くの水産業に関する資料、文獻を蒐集したが、同氏が故人となつて、その旧蔵のものは「祭魚洞文庫」として、関係機関に分離収蔵された<sup>6)</sup>。

私は前述の『魚名集覽』所引の古文獻の原本または写本の調査を目的に、「祭魚洞文庫」収蔵の古文獻を見たいと思つた。その第一歩として昭和五十二年九月、水産庁水産資料館の同氏旧蔵資料を調査した。しかし、水産庁水産資料館の「祭魚洞文庫」は、主として外国資料および現代の水産業に関する文獻が収蔵されていて、史料的な古文獻は文部省史料館、国立国会図書館等に収蔵されていることを今回の調査で知つた。しかし、水産庁水産資料館収蔵のうちにも数点の古文獻があり、その多くが「魚譜」の写本等であつた。そのうち、今回興味をもつたのは、渋沢が『魚名集覽』所引の参考文献として筆頭に記す『栗氏魚譜』である。

そこで、本稿はこの『栗氏魚譜』の原著者である栗本丹洲とその研究、特に水産物に関する著述について検討することとした。丹洲については、すでに先学の研究<sup>6)</sup>もあるが、まず、彼の生涯とその著作物について述べ、その後、彼の著作物の特色と思われる動物研究、特に魚類の研究として大成した「魚譜」について検討したいと思う。

## 一 栗本丹洲の実父

丹洲は名を昌臧・元東といい、後に幕府の侍医栗本元格昌友の養子となり、家名の元格・瑞見を名のつた。その後法印に叙せられて瑞仙院ともいつている。丹洲（以下、必要でない限り他の名はさき、これに統一する）は号である。丹洲は宝曆六（一七五六）年七月、江戸神田の本草学者田村藍水の第二子として生れた。

彼の父藍水は、本姓坂上、名を登、字を元台といい、通称は元雄（女雄）、号を藍水といった。十五歳で医業を学び、後に阿部将翁（進之助）について本草学を学んだ。元文二（一七三七）年、幕府から朝鮮人参の種子を得てこれを栽培し、同年『人参譜』を、延享四（一七四七）年『人参耕作記』・『人参植付考』、宝暦元（一七五一）年『参製秘録』、宝暦四（一七五四）年『人参図』、翌五年には『人参類集』などを著わし、後に幕府の医員に準ずる小普請医に挙げられる基をなした<sup>6)</sup>。

宝暦七（一七五七）年、丹洲が満一歳の誕生を迎えた同じ七月に、父藍水は江戸湯島において日本で最初の物産会を開いた。この会は、産物会または薬品会ともいわれ、本来は薬品を展示するのが主目的であったが、諸国各地より持ち込まれた品には薬品以外の珍品も含まれ、かなり規模の大きな会であつたらしい。

物産会はこれ以後毎年開かれていて、翌宝暦八（一七五八）年には藍水がふたたび神田で開き、九年には藍水の門人平賀鳩溪（源内）も湯島で開いている。翌十年には戸田旭山が大坂で、十一年には周防の人豊田養慶が京都で開いている。翌宝暦十二（一七六二）年四月の江戸湯島で開かれた平賀鳩溪の物産会は盛会であつたらしく、この時の出品物の主なものの解説が翌十三年に『物類品隲』六巻として刊行されている。この書は平賀鳩溪の著述であるが、藍水はそれに序を記している<sup>6)</sup>。

ところで、宝暦七年の物産会は、藍水自身の本草学者としての本領を發揮する場であり、彼の師阿部将翁以来の「西土諸家の閑文学」を排して国内各地を实地に踏査し藥物を論ずる学風<sup>9)</sup>を受け継ぐ催しであった。本草学はこれに物産学として新に進展したのである。

もと本草学は、阿部将翁が「西土諸家の閑文学」と彼以前の学統のことを評しているように、京都が中心であった。そのはじめは稻生(稻)若水であり、その門人松岡恕庵、松岡の門人小野蘭山らがその学統を受け継ぐものである。しかし稻生若水は加賀の前田綱紀の儒官となり『庶物類纂』を編述したが、未完のまま病没した。その後、この書は八代將軍徳川吉宗の命によって完成している。また、稻生の門人松岡恕庵は幕府の命により江戸へ出ている。京都の本草学はこれ以後江戸の本草学へと転じていった。こうした中で阿部は京都学統の流れをもたない純然たる江戸学統であり、藍水もまた江戸学統の継承者であった。江戸の本草学はこの物産学によってその特色を發揮するのである<sup>10)</sup>。

宝暦十三(一七六三)年、藍水は幕府医員に準じて小普請医に挙げられ、国産の人參製造を命ぜられた<sup>11)</sup>。幕府における人參製造は安永五(一七七六)年彼が歿し、長子の西湖(元長)に受け継がれている<sup>12)</sup>。

藍水が幕府における小普請医としての活躍は以上のことくらいしか明らかでないが、彼の著書を見ると、採薬のため、かなりの諸国に及んでいることがわかり、師阿部将翁の学問の姿勢をよく受け継いでいる。彼の門下には、前述の平賀鳩溪のほか彼の二子(西湖・丹洲)、曾占春らが出て活躍している。

## 二 丹洲、栗本家を継ぐ

丹洲は前述のように、田村藍水の次子として生れた。しかし、彼が本草家、医家として世に名が知られたのは田村姓ではなく、栗本姓である。丹洲がある時期に田村家から栗本家へ養子に入ったためである。

栗本家は代々医業を家業とし、幕府に仕えた家柄である。『寛政重修諸家譜』巻第一二九二の宇多源氏流に栗本氏の系図が記されていて、直方―昌綱―昌友―昌臧の四代となっている。丹洲はこの系図にみえる昌友の子昌臧である。それは「新次郎、元東、元格、瑞見、法眼実は田村元雄登が二男、母は田村氏の女、昌友が養子となりて其女を妻とす」とみえることからわかる。丹洲が田村家から栗本家の養子となったのはいつ頃であったかは記されていないが、栗本家に入ったことは事実である<sup>90</sup>。

ところでこの栗本家は、「佐々木太郎定綱の支族六角次郎満信近江国栗本郡に住す。其孫瑞迪正俊が時より医を業とし、紀伊家につかふ。直方はその男なり」と『寛政重修諸家譜』が記すように、近江の国栗本郡に居を構え、郡名を家名とし、紀伊家の医者として仕えた家柄であった。

『寛政重修諸家譜』に記す初代直方は、「紀伊家にをいて有徳院殿につかへまつり、享保元年本城といらせたまふのとき従ひたてまつり」とあるように、紀伊家の医者であった。直方が仕えていた紀伊家から吉宗が將軍となったので、吉宗に従って江戸城内に入り、幕府の侍医となった。直方は享保元（一七一六）年五月二十二日、紀伊藩より従った者たちとともに御家人に列している<sup>91</sup>。直方は享保十四（一七二九）年五月二十日に歿したが、その間奥医として吉宗に仕え、階位は法眼、侍医としては法印に次ぐものであった。また瑞見の名もこの直方よりはじまった<sup>92</sup>。

直方の死後、その子元格昌綱が家督を継いだ。昌綱は享保十三（一七二八）年十二月二十六日奥医の見習となり<sup>93</sup>、翌年七月十九日父の後を継いで奥医に列した<sup>94</sup>。その後、安永三（一七七四）年五月六日昌綱は家督を長子の昌友に渡したが<sup>95</sup>、その間吉宗・家重・家治の三代の將軍に仕えた。彼は、難産に用いる兎腦催生丹、痘瘡に用いる陰陽二血丸などの薬を調剤するなど、薬剤にも明るかったらしく、また奥医としてもかなり重視されていた<sup>96</sup>。安永四（一七七五）年正月二十三日彼は歿した<sup>97</sup>。

昌綱の長子昌友が家督を継いだのは安永四年であるが、彼は寛延三（一七五〇）年十二月二十六日にはじめて將軍

家重に拜謁した<sup>例</sup>。その後安永三(一七七四)年五月六日奥医の見習となった<sup>例</sup>。翌四年四月五日家督を継ぎ、七日奥医に列し<sup>例</sup>、同年閏十二月十一日法眼に叙された<sup>例</sup>。寛政元(一七八九)年二月九日病により務を辞し<sup>例</sup>、同五(一七九三)年十二月二十一日致仕した<sup>例</sup>。

昌友には三人の女子があったが、男子に恵れなかった。はじめ同じ侍医として幕府に仕えていた奥医河野仙寿院通頼の子を養子として迎えたが昌友より先に死んだ。『寛政重修諸家譜』には昌友の子として「某」と昌臧の二人の男子と三人の女子が記されていて、某について「亥五郎元格実は河野仙寿院通頼が三男、昌友が養子となりて其女を妻とし、のち父にさきだちて死す」とある。この某の実父河野仙寿院通頼は、昌友の父昌綱と同僚の侍医だった人物で、その縁によって昌友の養子となったのであろう。この某がいつ頃栗本家に入ったかは不明であり、またいつ死んだかもわからない。

某が死んで後昌友は昌臧を養子に入れた。昌臧は天明元(一七八一)年八月六日はじめて將軍家治に拜謁したが、この時のことについて『徳川実紀』巻第四十五、同年同月同条に「奥医栗本瑞見昌友が養子元格昌臧」と記していて、昌臧が栗本家の養子に入ってはじめて將軍に披露されたのであろう<sup>例</sup>。

昌臧の実父田村藍水が幕府の医員に推挙されたのは宝暦十三(一七六三)年であり、養父昌友が侍医となったのは安永三年である。栗本家はすでに代代が侍医として活躍しているが、藍水との交流は昌友の父昌綱以来であったと思われる。藍水は安永五(一七七六)年に歿しているので、昌友とは公的な立場では三年間しか接触の可能性がない<sup>例</sup>。したがって、田村と栗本の交流は藍水と昌綱・昌友の父子二代にあったとみるべきであろう。藍水は物産会の会主、また人參の製造で名声があり、昌綱・昌友は侍医として活躍した人物であるので、両家はかなりの交流があったものと考えられる。

昌臧すなわち丹洲はこのようにして栗本家の養子となった。のちの彼の本草家としての名声は実父藍水の影響に

よるものであり、医家としての名声は養父昌友の影響によるものである。丹洲は侍医として幕府の庇護のもと、本草学の研究がかなり自由に出来たとみえ、彼独自の研究方法で新しい本草学を進めることができたのである。以下丹洲の本草家としての面について述べてみよう。

### 三 本草家栗本丹洲

栗本昌友の養子となった丹洲は、その後医家として順調に進んだ。それは栗本家の家業である幕府侍医としての地位を継いだためである。彼の医家、幕府侍医としての活動は以下にみる通りである。

天明元（一七八一）年八月六日、丹洲は栗本家の養子に入つて、はじめて將軍家治に拝謁した。歳二十六の時である。のち天明五（一七八五）年十二月十五日奥医見習となり幕府の侍医の列に加えられ、寛政元（一七八九）年六月十七日奥医に列して蓮光院（家治妾）付となった。この時の丹洲の年令は三十四歳であり、これは養父昌友が奥医となった時の年令より五歳若いことになる。この年の二月九日、すでに父昌友が病氣を理由に務めを辞し、寄合となつていたので、丹洲は事実上父の後を継いで侍医になったことになる。また同じ年十二月十六日には、丹洲は法眼に叙された。

寛政三（一七九一）年四月二十七日、蓮光院付の職を解かれた丹洲は一時寄合となったが、六月六日には再び奥医に復している。その後種姫付となつていたらしく、寛政四年四月十九日にはその役目を解かれ、また奥医に列した。同年七月二十三日には竹千代君（家斉の長子）の生誕に参与した者に褒賞があつたが、そのうちに丹洲の名もみえてゐる。

寛政五（一七九三）年十二月二十一日、幕府の侍医としての実務から離れていた父昌友が致仕、丹洲は名実ともに

栗本家の家督と家業を継いだことになる。この時歳三十八であった。

その後の医家としての丹洲については、顕著な活動はみえないが、文政四(一八〇七)年には侍医としての最高位である法印に叙されて瑞仙院と称している<sup>8)</sup>。また、天保四(一八三三)年には老令を理由に職を辞したが、「御番御用捨勤務勝手次第」という優遇を受けている<sup>9)</sup>。

しかし、翌五年三月二十五日ついに歿した。享年七十九歳であった。墓は直方以来栗本家の菩提寺である江戸四谷の日宗寺にある<sup>10)</sup>。

丹洲の幕府侍医としての活動は以上述べたことに尽きるが、本草家としての活動にもみるべきものがある。本草家丹洲について、増島蘭腕は「今之言本草者。若水稻生氏為祖。恕庵松岡氏為稱。繼後起者。藍水田村氏大洲大田氏蘭山小野氏丹洲栗本氏其傑然者也」と本草学の系統とその傑出した人々を簡潔に述べているが<sup>11)</sup>、その一人に丹洲をあげている。

丹洲はすでに述べたように、幕府の侍医として名声が高かった。しかし、その前半生においては著作らしきものがない。ところが寛政六(一七九四)年、幕府医学館の教諭に任ぜられ、本草を講じ薬品を鑑定するようになる<sup>12)</sup>、その後は多くの著書を著している。今、丹洲の著作物を『国書総目録』によって検索すると、三十余点のものがあつる。それらを成立年代の判明できるものと成立年代の不明のものに分け、成立年代のわかるものについては年代順にし示すと第一表のようである。

一瞥してもわかるように、丹洲の著作はに医学書らしきものは一点もなく、本草の書、なかでも生物に関する著書が多いことに気づく。また生物のなかでも動物・魚介の類に偏っているのが特徴的である。このことについて丹洲は、彼の著作である『千虫譜』の「栗氏虫譜小引」や「再題自画虫譜」と題する序によって、医術に携わり、薬品を正しく用いるため本草を究め、本草に精通するためには、単に草木に詳しく、虫魚に粗略である現状ではよくない。そこ



第一表 栗本丹洲著作一覧表  
A、成立年代のわかるもの

成立年代	植 物	動 物	魚 介	そ の 他	備 考
寛政六(一七九四) 同九(一七九七)	①カラフト草木図 ③蝦夷草木図				<p>●この年幕府医学館教諭となる。この年『千虫譜』着手</p> <p>①『国書総目録』は②を①の別称とする</p> <p>②『明治前日本生物学史』による。</p> <p>③『丹洲虫譜』等の書名あり。この書の別称か。B―⑭・⑮参照。</p> <p>⑥別称『丹洲先醒翳蠅二考』</p> <p>⑩『明治前日本生物学史』は文政九年としている。</p> <p>⑫序のみ現存。</p> <p>⑬小野薫猷と共著</p> <p>⑭丹洲の死後、門人大淵音範等校訂刊行。なお、『丹洲魚譜』等の書名も別にあるが、これらを集大成したものといえる。</p>
文化八(一八一二) 文政三(一八一〇) 同六(一八一三) 同七(一八一四) 同八(一八一五)	⑦研芳園蒲桃記	③千 虫 譜 ④ 蟬 説 ⑥ 翳 蠅 二 考 ⑧ 竜 絵 巻 物	⑤王余魚図彙 ⑨ 鱒 魚 志 ⑩ 翻 車 考		
同九(一八二六) 同十(一八二七) 天保四(一八三三) 同九(一八三八)	⑫園生の錦	⑪巧婦鳥巢説	⑭皇和魚譜	⑬薬品会目録	

B、成立年代不明のもの

本 草 植 物	動 物	魚 介	そ の 他	備 考
①合類水虎説 ⑤仙台葦譜 ⑥併入百品画	⑥水 虎 考	⑭魚 介 譜	⑮古代遺什	④安政六年の写本あり。

<p>②丹洲翁七種雜考 ③人參弁 ④本草存真図</p>	<p>⑦列木蠟考 ⑧信天縁海鷲図説 ⑨鳥 ⑩栗氏禽譜 ⑪百鳥譜 ⑫鳥獸魚写生図画 ⑬虫豸図譜 ⑭栗氏虫譜 ⑮丹洲虫譜 ⑯毒蛇法部図説</p> <p>⑰栗氏魚譜 ⑱丹洲魚譜 ⑲天狗爪石拙攷 ⑳天保十四年の写本あり。</p>	<p>①天保十四年の写本あり。 ②別称『あやかし考』 ③『明治前日本生物学史』による。 ④別称『ハブ拙考』 ⑤『丹洲魚譜』・『栗氏魚譜』は別称か。 ⑥『明治前日本生物学史』による。 ⑦奥倉辰行が画を書いている。</p>
-------------------------------------	--	---

(註)

- 1、本表は、岩波書店『図書総目録』所載の書目から、栗本丹洲の著とするものを検出して表にし、『明治前日本生物学史』によって若干補った。
- 2、著述の性格による分類は、『図書総目録』に従った。
- 3、表中の書名の頭書にある○内の数字は、A・Bそれぞれの通し番号とし、備考欄の注記の番号と符合するようにした。但し、Aの番号は成立順。
- 4、シーボルトが瑞見(丹洲)から得たと思われる『蟹蝦類写真』上・下はこの表に入れなかった。本文の註⑭および第二表参照。

で虫魚について究明するのだという意味のことを記しているが、これによって丹洲の著作の傾向が推し測られるであらう。

丹洲の本草における知識は、彼の医家としての活動の中で培われたことはいままでもないが、それよりもまして、実父田村藍水の影響を無視することはできないであらう。藍水はすでに記したように、稻生若水の京都学統とは別の

学統である、阿部将翁にはじまる実地実証の江戸学統を継承した本草家である。丹洲が実父藍水の研究姿勢を学び、その知識を多く修学していたことは、藍水の精通する人参研究に関連して丹洲も『人参弁』という著作のあることでもわかり、丹洲の最も特質である生物の実写（自画による観察写生。これを「写真」と称している。）は、まさに実地実証の研究姿勢を正統に受け継いだものといえよう。

また、藍水の門人には藍水の長子で丹洲の実兄にあたる田村西湖、平賀鳩溪（源内）、曾占春などがあるが、丹洲はこれらの人々とも親交があったと思われる、寛政六年以後における丹洲の本草家としての活動は、すでにその素地をもっていた点において当然の経路といえよう。

丹洲の本草家としての活動は、寛政六年の医学館教諭就任にはじまるのであるが、この年から十八年、丹洲は「毎獲一虫樊以養之。手自写真彙類附説」と記すことから分るように、虫を捕っては必要があれば飼育観察し、自画によつて実写し、類別して附説し、それらが数千に至つたので『千虫譜』を完成させた。時に文化八（一八一二）年である。

この『千虫譜』の内容の詳細については今は省略するが、この書の完成は丹洲の本草学の研究領域を決定づける最初の著作となつた。丹洲の著作は、すでに寛政九（一七九七）年『カラフト草木図』を著わしてはいるが、のちの丹洲の研究領域が動物図譜に偏っている点からみて、『千虫譜』はその出発点といえよう。

一方、江戸時代の本草学の展開からみると、『千虫譜』の完成は、享保より盛んとなつた本草学が、寛政期に至つて最も隆盛し、博物学的傾向を生み、丹洲に至つては「江戸時代の博物学が既に動物学にまで一步を進めたことを示すに足る」<sup>84)</sup>ものである。丹洲の名声はここに幕府侍医としてだけでなく、本草家としても高くなり、例えば前田利保のような本草に興味をもつ大名とも学問的なつながりをもつようにもなつた<sup>85)</sup>。

## 四 シーボルトとの会見

栗本丹洲が幕府の侍医として、また本草家として活躍したことはすでに述べた通りである。しかし、丹洲が本草家として、特にその著述活動が活発となるのは寛政六(一七九四)年幕府医学館教諭に任ぜられ本草を講ずることになってからのことである。この時丹洲は三十九歳であるから、当時としてはかなりの年令に達してからのことになろう。

丹洲の後半生におけるこのような変革は、実父田村藍水の本草学を学んだこと、幕府医学館において本草学を講じたことによるとしても、もっと他に転機となる要因があったと思われる。

丹洲の著作物の特色は、本草の特に動物図譜に偏っている点であるが、それが『千虫譜』の序に記すように、既製の本草の書が草木に偏って虫魚に粗略であったがためである。しかし、こうした意識は伝統的な本草を継ぐ者として、単に過去の本草学批判という理由だけのものではあろうか。

それについても丹洲は偶然とも思える理由によって後半生の活動が決定づけられたといえるように思う。それは二人の外国人との接触である。その最初は寛政六年四月オランダの商館長ヘンミー Gysbert Hemmy が医師ケルレル Bernhardt Keller とともに江戸に参府した時で、丹洲は彼らと対談している。この時、丹洲はケルレルらと物産のことについて論じたいらしいが、その内容については不明である<sup>80</sup>。しかし、丹洲にとって、寛政六年は幕府医学館教諭就任の年であるから、偶然であるにしてもオランダ医師ケルレルと対談ができたことは、丹洲にとっては大きな刺激となったにちがいない。

つぎに、やや時期は下るが文政六(一八一三)年七月六日シーボルト Philipp Franz von Siebold が長崎に来航し

て来た。丹洲はこのシーボルトとも接触している。シーボルトは周知のように日本滞在中において多くの日本人と接触し、大きな影響を与えた。シーボルトの日本滞在中における活躍および日本人におよぼした影響等、シーボルトに関する研究は、すでにすぐれた先学の研究<sup>88)</sup>があるので詳述しないが、シーボルトが日本人に与えた影響が大である以上に、シーボルト自身にとつても、日本において知己を得た当時の有力者、有識者から日本についての資料を得るため協力と援助を受けたことも事実である。

シーボルトが帰国後著述した『日本』・『日本動物誌』・『日本植物誌』のいわゆる三部作<sup>89)</sup>の資料は、もちろんシーボルト自身の手によつて蒐集したものが多くを占めているのであろうが、シーボルトが医師であり動植物学者である点からみて、当時の日本の本草家から得た資料も少なくはない。それは、シーボルトの三部作中に、これら日本人から得た資料について、その提供者の名と資料の日本名が明記されているし、『日本』の中で、シーボルトが知己を得た日本人をかかなりの重みで紹介している。今、シーボルトの研究で著名な呉秀三氏が分類されたものによると、シーボルトが接触した日本人の数は一一五名に及んでいるが、その内訳は、

- 一、門下として直接教を受けし人々（五七名）
- 二、面会又は交際せし人々（二五名）
- 三、長崎の町年寄及び通詞（一四名）
- 四、諸侯（六名）
- 五、再度渡來の時面会をして益を求めし人々（一三名）

とされている、丹洲は二のうちの一人としてみえる<sup>90)</sup>。

丹洲がシーボルトとどのように接触したかについては、シーボルトの『日本』第二版の第一卷第二章にあたる「一八二六（文政九）年における將軍の居城への旅」〔江戸参府紀行〕に、左のような一文がある。

四月二十五日(旧三月十九日) 將軍の侍医、とくに眼科医の訪問をうける。私は眼科についての書物と眼科関係の機械をいっしょに見せる。ペラドンナを使って瞳孔をひらく実験を二・三回行う。そのいちじるしい効能に大喝采を博す。幕府の本草家栗本瑞見 *Suisen* がたくさんの植物の絵巻物とたくさんの日本や中国の魚類・すばらしい甲殻類の画集を私に見せてくれる。薩摩侯の側室から診察を求められる。

シーボルトが丹洲との会見を記したのは右の一日にすぎない<sup>(4)</sup>。しかし、シーボルトは江戸に到着した四月十日(旧三月四日)から江戸を離れる五月十八日(旧四月十二日)までの一ヵ月余の間、頻繁に幕府の侍医の訪問を受けたと記している。丹洲もあるいは何度か訪問したのではあるまいか。丹洲が自画の動植物の図巻を持って訪問したのは、シーボルトが医者であると同時に動植物学者であることを知ったためである。シーボルト自身、紀行文中に多くの日本人から動植物の標本などを得たことを記している。本草家として高名な丹洲に、日本の動植物について問う絶好の機会であり、シーボルトはおそらく丹洲にそれを求めたのであろう。

シーボルトは丹洲が示したこれらの図がかなり緻密であり、すぐれていると認めたことは、前文でも充分くみとれるが、彼は丹洲からこの図の一部を得たらしく、後に本国へ送った日本に関する文献目録に『蟹蝦類写真』(Kaika ruisasin)二冊と『魚類写真』(Gjorni sjasin)三冊をあげ、これが栗本瑞見(丹洲)の著述であることを示している<sup>(5)</sup>。シーボルトの三部作のうち『日本動物誌』の甲殻類編には、その筆者であるデ・ハーン *de Haan* がしばしば丹洲の名を挙げ、『蟹蝦類写真』の図によったことを示している。デ・ハーンが丹洲によって得た甲殻類の日本名は三一種におよび、それらは第二表に示した通りである<sup>(6)</sup>。シーボルトが丹洲から得た資料をいかに重視していたかをこれによっても知ることができよう。また丹洲にとってもシーボルトとの出会いが大きな刺激となったことは、第一表の丹洲の著作目録によってもわかるように、シーボルトと出合った文政九(一八二六)年ごろが著述活動の最も活発な時期でもあり、充分に推測することができよう。

丹洲が著わした著作、図譜は頗る多く、すでに第一表で示した通りであるが、成立年代の明らかなものは一三点にすぎない。しかも丹洲の唯一の刊行された図譜『皇和魚譜』は、丹洲が幕府侍医として任務に就く傍ら、資料を蒐集し、一葉ずつ写生していたものを、後世門人大淵常範（丹洲の孫）が校訂、丹洲の友人栗本伯資が模写し、丹洲の死後四年に到って、天保九（一八三八）年ようやく完成したものである。このようであるから、『栗氏虫譜』・『栗氏魚譜』・『栗氏禽譜』などの書目は、そのほとんどが後に筆写されたり、集められたりしてできたものであるといえよう。しかし、『千虫譜』・『皇和魚譜』に代表される丹洲の図譜は決してその価値を失うものではない。（未完）

註(1)

本書は昭和十七年、十八年、十九年の三年に分けて出版され、その後、昭和三十三年十二月角川書店より、第一部資料編、第二部索引編として再版されている。なお、昭和四十七年、三一書房が『日本常民生活資料叢書』（全二四巻）を出版したが、そのうちの第三巻、水産編に収めている。

(2) 昭和三十三年角川書店版の第一部の「再版に際して」と題する序に記している。

(3) 『魚名集覽』所引の文献書目によると、A1からA198は『古事類苑』動物部から引いたとしている。

(4) 祭魚洞文庫は、現在国立国会図書館、水産庁水産資料館、文部省史料館（国立国文学研究資料館）、流通大学などに分置されている。

(5) 栗本丹洲については、白井光太郎『改訂増補日本博物学年表』（昭和九年）、藤浪剛一「栗本瑞仙院の事蹟とその墓所」（中外医事新報、一二二五）、三宅恒方「栗本瑞見翁ノ千虫譜ニ就キテ」（昆虫世界、一六の一七三）、日本学士院明治前日本科学史刊行会編『明治前日本生物学史』第一巻（昭和三十五年）などが詳しく参考になる。

(6) 藍水については、尾藤正英「江戸時代中期における本草学」（『歴史と文化』Ⅱ、東京大学教養学部人文学紀要、第一一集、歴史学研究報告、第五集、昭和三十二年）によるところが多い。なお、藍水の著作については、岩波書店『国書総目録』（全八巻）（昭和三十八年）昭和四十七年）によった。藍水の著作はかなりのものがあるが、成立年代のはっきりしているものだけでも、本文に記したものの他、『増補人參耕作記』（明和元年）、『中山伝信録物産考』（明和六年）、『琉球産物志』（明和七年）などがある。

(7) 藍水らの宝暦八年以降における物産会は、平賀鳩溪『物類品隨』(最近、杉本つとむ解説、八坂書房発行の活字本がある。昭和四十七年刊)の凡例および『明治前日本科学史』総説編(昭和三十五年)の年表によった。

(8) 尾藤正英、前掲論文および『明治前日本科学史』、『明治前日本生物学史』などに阿部将翁の学風が述べられている。

(9) 尾藤正英、前掲論文によると、稲生若水にはじまる京都中心の学統を正統派、阿部将翁の江戸中心の学統を別系統とされている。一応、この二系列の学風を、京都学統、江戸学統とそれぞれ呼ぶことにする。

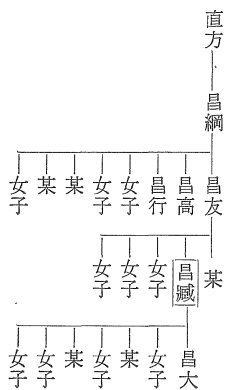
(10) 『浚明院殿御実紀』巻七(新訂増補国史大系『徳川実紀』第一〇篇。以下『徳川実紀』は新訂増補国史大系を使用した。)、宝暦十三(一七六三)年六月二十四日条に

医田村玄雄玄台召出されて。生涯月俸三十口を賜はり。医員に准じて小普請にせられ。韓種人侵の事を司どらしむ。此玄雄は。本経の学に長じ。常に諸国を涉歴し。薬材を広くもとめ出し。著述の書も少からずとの聞え有て。こたびかく命ぜられしなり。とある。

(11) 『浚明院殿御実紀』巻三十五(『徳川実紀』第一〇篇)、安永五(一七七六)年七月十六日条に

前の小普請医田村元雄玄台うせければ。其子元長某べつにめし出されて。月俸三十口を賜ひ。人葎製する事をつかさどらしむ。とみえる。

(12) 『寛政重修諸家譜』卷二二九二、宇多源氏流、栗本系図(栄進舎出版部版『寛政重修諸家譜』第七輯。以下、書名のみ記す)には次のように記している。





なお、丹洲は系図の昌臧で、栗本家の養子となった時期については記していない。ただ、『明治前日本生物学史』（第一巻）には、安永七（一七七八）年であるとしている。

- (13) 「有徳院殿御実紀」巻一（『徳川実紀』第八篇）。なお、『寛政重修諸家譜』の「直方」の経歴に「享保元年本城にいらせたまふのとき従ひたてまつり、六月二十五日奥医となり、……」とあるが、この同じ日付の『徳川実紀』（第八篇）の記事では「医員栗本瑞見直方。林宗雪某尚薬を命ぜらる」とある。

(14) 直方の歿年は『寛政重修諸家譜』によった。

(15) 『寛政重修諸家譜』の昌綱の経歴。

(16) 『寛政重修諸家譜』、『徳川実紀』（第八篇）

(17) 「浚明院殿御実紀」巻二九（『徳川実紀』第二〇篇）

(18) 『徳川実紀』（第八篇）の元文四（一七三九）年二月四日条、天文五年正月廿九日条、延享元（一七四八）年正月廿一日条に薬の調剤のことがみえる。

(19) 『寛政重修諸家譜』

(20) 『寛政重修諸家譜』、『浚明院殿御実紀』巻二九（『徳川実紀』第一〇篇）。

(22) 『寛政重修諸家譜』、『徳川実紀』（第二〇篇）。ただし、家督相続のことは『徳川実紀』には明確には記されていない。しかし、五日の条に「父死して。家つぐもの八人」とみえ、あるいはこのうちに列していたのであろうか。また、四月七日奥医に列したとあるのは『徳川実紀』で、『寛政重修諸家譜』は四月十日としている。

(23) 『寛政重修諸家譜』、『徳川実紀』（第一〇篇）

(24) 「文恭院殿御実紀」巻二二（『統徳川実紀』第一篇）に「九日奥医師栗本瑞見昌友病もて診脈を免さる」とある。ただし、『寛政重修諸家譜』は二月二日としている。

(25) 『寛政重修諸家譜』によった。なお、『統徳川実紀』（第一篇）の同年同月同日の記事に「父致仕して子家つぐ者廿五人」とあり、このうちに入っていると思われる。

(26) 栗本丹洲（昌臧）の経歴については『寛政重修諸家譜』に略出しているので、これをもとに『徳川実紀』と併せ見た。以下、その対照した点（（ ）内に記した）を『寛政重修諸家譜』の記事に沿って記すと次のようである。

天明元年八月六日はじめて浚明院殿に拜謁し（『徳川実紀』に合う）、五年十二月十五日奥医見習となり（『徳川実紀』

- に合う)、六年十一月廿九日より西城御広敷の療治をうけたまはり(『徳川実紀』該当日にみえず)、寛政元年六月十七日奥医に列し(『統徳川実紀』に合う)、のち蓮光院御方に附られ(『統徳川実紀』第一篇、寛政三年四月二十七日条に、蓮光院殿医官として、その職を解かれ、寄合医となったことがみえる)、十二月十六日法眼に叙し(『統徳川実紀』に合う)、三年四月二十七日寄合に列し(『統徳川実紀』に合う)、六月六日奥医に復し(『統徳川実紀』に合う)、十四日種姫君に附属せられ(『統徳川実紀』該当日にみえず)、ただし、寛政四年四月十九日条に「奥医河野松庵通久種姫君に附せられ。種姫君医栗本元格昌臧奥医となる」とみえる)、四年四月十九日奥医となり(『統徳川実紀』に合うことは前文で明らかである)、七月二十三日竹千代殿生誕の事をうけたまはりて黄金二枚をたまふ(『統徳川実紀』に合う)。五年十二月二十一日家を継時三十八歳 采地三百石(『統徳川実紀』該当日に丹洲のことはみえないが、この日「父致仕して子家つぐ者廿五人」とあるから、このうちの一人であろう)。八年三月二十八日敦之助君生誕のときも黄金二枚を賜ふ(『統徳川実紀』該当日は、敦之助君生誕の祝いの品を諸侯が進めた記事で、功賞のことは翌二十九日となっている。ただし、丹洲の名はみえず、「其他其事にあづかりし輩賜物差あり」とみえるうちの一人か)。妻は昌友が女。
- (27) 昌友が將軍家重に拜謁したのが寛延三(七五〇)年であるから、その後田村藍水との接触があったとしたら、藍水の歿した安永五(一七七六)年まで二十六年間ある。しかし、栗本家においてはまた昌友の父昌綱の時代であったとみるべきであろう。
- (28) 丹洲の経歴については、すでに註(26)に一括して記したので出典も合せて参照されたい。
- (29) (30) (31) 丹洲の寛政期までの経歴は、上述の史料ではぼ明らかであるが、その後についてはほとんど『徳川実紀』にもみえない。したがって、文政四年法印昇叙以降の経歴は『明治前生物学史』(第一巻)および呉秀三『シーボルト先生』(3)(平凡社、東洋文庫一一七、昭和四十三年刊)の註などによった。
- (32) 栗本丹洲著、大淵常範等校訂『皇和魚譜』の天保戊戌(九年)秋八月の序。なお、増島蘭腕は田村西湖の門人であり、西湖の実弟丹洲の著作物に対する序である点では、丹洲の評価はいささか誇大化されていることを考慮すべきであろう。また、『皇和魚譜』は丹洲の唯一の刊行本であり、『千虫譜』とともに動物学的研究の代表作である。さらに検討をするため、後述する予定である。
- (33) 『千虫譜』(内閣文庫本によった)の文化八(一八一二)年の「再題自画虫譜」と題する序に「寛政甲寅瑞見辱奉台命。講本草於医学兼鑿訂藥物十八年」と記している。寛政甲寅は寛政六年である。
- (34) 『千虫譜』の「栗氏虫譜小引」と題する序に「為医者可不究夫物理而察其良毒乎。於是聚諸虫以焚之医余手自写真四時代謝

品類不同積久終以百數焉」とあり、また「再題自画虫譜」に「寛政甲寅瑞見辱奉台命。講本草於医学兼鑿訂藥物十八年。于茲多識鳥獸草木之名。雖然世々不乏其人著者。行于世者可汗百牛也。至集彙虫類寥寥無聞焉。豈不欲典乎。公私之暇以此為念。每獲一虫爰以養之。手自写真彙類附說」とある。

(35) 『明治前日本生物学史』(第一巻)

前田利保は越中富山藩主で、万香亭と号し、多くの著述を残しているが、その代表作は『本草通串』九四巻および『本草通串証図』がある。利保の本草および博物学は単なる上流人の興味本位のものでなく、天保七(一八三六)年ごろ成立したと思われる「赫鞭会」と称する博物学研究会の中心的役割を果し、丹洲をはじめ岩崎灌園、武蔵石寿、飯室菜圃らから、当会の例会を通じて多くの知識を得た。『明治前日本生物学史』第一巻)

(37) 『明治前日本薬物学史』(第一巻)

(38) シーボルト研究は数多くあるが、本論文に参考としたものを掲げておく。

吳秀三『シーボルト先生其生涯及功業』全三巻(東洋文庫、平凡社、昭和四十三年刊)

日独文化協会『シーボルト研究』(岩波書店、昭和十三年刊)

板沢武雄『シーボルト』(人物叢書、吉川弘文館、昭和三十五年刊)

(39) シーボルトは文政十二(一八二九)年日本を去ったが、三部作はその後の著述であり、以下に示すような出版がなされた。

『日本』Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezomit den südlichen Kurilen, Sachlin, Korea und den Linkin-Inseln

一八三二(天保三)年に第一分冊が出版されて以後、ほぼ毎年一冊ずつ二〇冊が一八五一(嘉永四)年までに出版された。一八五二年最後の一冊を出版する予定であったが未完に終わった。これが初版本といわれるものである。その後、一八九七(明治三十)年シーボルトの生誕百年を記念して、彼の子アレキサンダーとハインリヒが二冊本として出版したが、吳秀三らにより翻訳されたいわゆる『江戸参府紀行』は、この第二版の第一巻第二章の全訳である。

『日本動物誌』Fauna Japonica

一八三三(天保四)年から一八五〇(嘉永三)年の間に五分冊として出版された。この書はライデン国立博物館長テンミンツ Coenraad Jacob Temminck およびデーン・ファン・デ・Haan、シユレーゲル Hermann Schlegel の協力を得ている。丹洲から得た資料はこの書に引用しているが、特に第一冊の甲殻類中に彼の作とする『蟹蝦類写真』上・下が引

用されている。

『日本植物誌』 Flora Jaoanica

一八三五(天保六)年から一八七〇(明治三)年までに二〇分冊として出版された。ミュンヘン大学教授ツッカーニ

Joseph Gerhard Zuccarini の協力によって完成したものである。

なお、この三部作は最近日蘭学会の監修により講談社から復刻出版された。『NIPPON』全五巻・解説一卷・付図一葉(テキキスト編Ⅰ・Ⅱ、図版編Ⅰ・Ⅱ、補巻、図版解説、付図、昭和五十年刊)・『FAUNA JAPONICA』全五巻・解説一卷(甲殻類、哺乳類、鳥類、爬虫・両生類、魚類、解説書、昭和五十年刊)・『FLORA JAPONICA』全三巻・解説一卷(テキキスト編、図版編Ⅰ・Ⅱ、解説書、昭和五十一年刊)となっている。

(40) 吳秀三『シーボルト先生その生涯及び功業』3(東洋文庫、平凡社、昭和四十三年刊)

(41) 原文の題は“Reise nach dem Hofe des Sjogun im Jahre 1826”(講談社復刻本では、補巻に入れてある)である。吳秀三はこれを「一八二六年の江戸参府紀行」と訳し、以来『シーボルトの江戸参府紀行』がシーボルトの著作では最も有名となった。現代、吳秀三訳注のもの(異国叢書、駿南社、昭和三年刊)のほか、齊藤信『江戸参府紀行』(東洋文庫、平凡社、昭和四十二年刊)があり、また『日本』(第二版)の全訳本として、齊藤信・金本正之訳『シーボルト「日本」(全九巻)(雄松堂書店、刊行中)がある。いわゆる『江戸参府紀行』の部分は、雄松堂書店の訳本では第三巻(昭和五十三年刊)に収まっている。本引用文は、この訳文をそのまま転載した。

(42) 丹洲の二著は、シーボルトと Hoffman(シーボルトが帰国後出合った助手で、後ライプティン大学教授となり、日本学を講義した)の共著である『シーボルト蒐集の日本書籍・文書目録』(DE SEEBOLD, PH. FR.: Catalogus Librorum et Manuscripto rum Japonicorum a Ph. Fr. de SEEBOLD collection, etc., 1845)の中に

267. Kaika rui sjasin, pisces diversae Crustaceorum species, ad nat. del. Kadsuragawa Kurimoto Suitken. 2 voll. in fol. (鱈鰓類写真桂川栗本瑞元)

272. Gjorni sjasin, pisces diversi; ad. naturam delineavit Kadsuragawa Kursinoto Suitken. 3voll. in folio. (魚類写真真桂川栗本瑞元)

とあげている。桂川は他人と混同したのであり、瑞見すなわち丹洲である。

(43) デーラーンが『日本動物誌』甲殻類編に採用している丹洲の資料は、Suitken, Tabulae pictae Crustaceorum Japonico-

rum, 小龍也。其たじなを蟹といひて Suiken, Tab. pict. Crust. Jap. 小龍也。『龍民の日本海産蟹類図説』のこゝに載る。ゆゑに。トニクニの五里を龍民(虫類)の図に於てはゆゑ。

(第二表) シーボルト『Fauna Japonica-crustacea』所引の丹洲の甲殻名

日本動物誌の頁	瑞見の和名(括弧内は現在通用の和名)	現在の学名	De Haan の挙げている蟹類類号真の図版番号
P. 37	カザミ, カゼガニ, カザノリ, <u>ウミカニ</u>	<i>Portunus trituberculatus</i>	Suiken, figs. 129, 132
P. 44	イナヨウガニ(ノコギリガザミ)	<i>Scylla serrata</i>	Suiken, fig. 109
P. 46	(ホソマソジユウガニ)	<i>Atergatis integerrimus</i>	Suiken, PL XV, figs. 79, 80
P. 46	マソヂウガニ(アカマソジユウガニ)	<i>Atergatis subdentatus</i>	Suiken, figs. 79, 80
P. 46	(スベスベマソジユウガニ)	<i>Atergatis foridus</i>	Suiken, PL XXI, fig. 114
P. 51	エソコウガニ	<i>Carcinoplax longimanus</i>	Suiken, figs. 120, 121
P. 53	シホマキ, <u>タウチカニ</u>	<i>Uca arcuata</i>	Suiken, figs. 33, 34, 35
P. 54	スナガニ, カクレガニ(ヤマトオサガニ)	<i>Macrophthalmus japonicus</i>	Suiken, figs. 52, 53
P. 59	ヤナリ, ソガニ, ヤマガニ, <u>モクゾガニ</u> <u>モクソウガニ</u> , <u>イカニ</u> (モクズガニ)	<i>Eriocher japonicus</i>	Suiken, fig. 63
P. 62	(クロベソウチイ)	<i>Sesarma (Holometopus) dehaani</i>	Suiken, figs. 17, 47, 57, 58
P. 62	アカハサミ, <u>狸々ガニ</u> , <u>ベソウチイガニ</u> (アカチガニ)	<i>Sesarma (Holometopus) haematochei</i>	Suiken, figs. 50, 51, 85, 86, 87
P. 63	(ムソウソガニ)	<i>Hexapus serpes</i>	Suiken, fig. 10
P. 71	ベニソウマソチウガニ(メガネカマツバ)	<i>Calappa philargius</i>	Suiken, figs. 59, 74, 75
P. 73	(キノセソモドキ)	<i>Marsia armata</i>	Suiken, fig. 24
P. 76	ヤドカリ(?)	?	Suiken, fig. 38
P. 107	ミズヒキガニ(サナダミズヒキガニ)	<i>Latreillia phalangium</i>	Suiken, figs. 122, 123

p. 121	キモノガニ	<i>Dorippe frascone</i>	Suiken, fig. 3
p. 122	ヘイケガニ	<i>Parada japonica</i>	Suiken, figs. 41, 43
p. 128	キソモソガニ	<i>Maitia lunaris</i>	Suiken, PL LV
p. 133	コゾソガニ, チカラガニ, マダガニ, (ヨソメコゾソガニ)	<i>Leucostia unidentata</i>	Suiken, figs. 104, 107
p. 140	ビヘガニ (ビロガニ)	<i>Lyreidus tridentatus</i>	Suiken, figs. 66, 70
p. 171	チナガエビ	<i>Macrobrachium longipes</i>	Suiken, II, PL VI, fig. 3
p. 177	ハジキ (テツボウエビ)	<i>Alpheus brevicristatus</i>	Suiken, II, PL, 8, fig. 4
p. 192	ムナソリ (ヨソエビ)	<i>Metapennaens ensis</i>	Suiken, II, PL VIII, fig. 5
p. 209	ヤドカリ (オニヤドカリ)	<i>Aniculus aniculus</i>	Suiken, II, PL I, fig. 3
p. 212	(ヤソガニ)	<i>Birgus latro</i>	Suiken, PL XIX, fig. 103
p. 213	(オカヤドカリ)	<i>Coenobita perlata</i>	Suiken, fig. 100
p. 217	ソマガニ (タラバガニ)	<i>Paralithodes camtschatica</i>	Suiken, PL XXXII
p. 218	イバラガニ, マカオニガニ (イガヅリガニ)	<i>Paralomis histrix</i>	Suiken, PL X, fig. 62
p. 221	(トラソソヤコ)	<i>Lysiosquilla sulcirostris</i>	Suiken, PL VIII, fig. 9
p. 229	カゾトガニ	<i>Tachypleus tridentatus</i>	Suiken, PL XXX, XXXI

- (註) 1. 本表はソールト『日本動物誌』(講談社版)の解説編に記す表をもとに、『千虫譜』と比較したものである。
2. 本表に使用した記号は、『千虫譜』との比較を示すものである。
- 『日本動物誌』が瑞見(丹洲)の資料により記した和名で、『千虫譜』にもみえるもの。
- ==== 『日本動物誌』にはみえないが、『千虫譜』が別称として記すもの。
3. 表中の Suiken はズイケン、すなわち栗本瑞見(丹洲)のことである。

〔付記〕 本論文は、昭和五十二年度関西学院大学特別研究員として調査・研究したものの報告である。したがって、本来ならば一挙に掲載すべきものであるが、紙面の関係もあるので、(一)・(二)に分け発表することにした。

なお、研究期間中は特に水産庁水産資料館を利用したのであるが、当資料館の横山浩館長が種々の便宜を与えて下さった。厚く謝意を述べたい。また、横山館長を紹介して下さいました細野嘉助翁には特に感謝したい。